

## [制作記録]

## メキシコ滞在制作報告記

A Report of Stay and Work in Mexico

山 本 健 史

YAMAMOTO Takeshi

はじめに、なぜ私がメキシコで作品を制作することになったのか、その経緯から説明しましょう。故高橋清氏は1952年に東京美術学校卒業後、1958年にメキシコに渡りその後11年間にわたり彫刻家としてまたベラクルス州立大学彫刻科の教員として幅広く、また濃密な活動をされました。その後1959年に日本に帰国、金沢美術工芸大学彫刻科の教授を歴任されています。

高橋氏の影響はメキシコにおいてもまた日本においても多大であり、今回ベラクルス州立大学研究所ではその業績をたたえる意味で、彼に師事した作家たちの作品と彼の作品によるオマージュ展が企画されました。展覧会企画スタッフの中心的存在であったのが矢作隆一氏（彫刻家。金沢美大彫刻科卒業。現ベラクルス大研究所職員）です。矢作氏は金沢美大の教員であった高橋氏とベラクルス大学の縁を未来につなぐ意味で、高橋清オマージュ展と並行する形で金沢美大の教員を招く教員交流プロジェクトを立案しました。そのトップバッターとして私がメキシコに渡ることになったのです。

2012年4月2日夕方出発の予定でしたが、航空機の機体不具合や悪天候が重なり、メキシコシティ到着は4日夜になりました。到着の翌朝は+14時間の日本時間のリズムのまま昼寝をしたような感覚で朝を迎え、そのままバス便で約5時間かけてメキシコ湾岸近くの町ハラパへ移動しました。ハラパは標高が約1500mあり、高地であるため朝は寒いぐらいの気温ですが昼の日差しは強く、時に30℃に手が届く日もあります。4月は乾期で1年の中でも比較的高温の季節ですが6月以降は雨が多くなり気温は

それほど高くないそうです。人口は40万人を超え、ベラクルス州第2の町として発展しています。6日は金曜日でしたが到着の遅れもあり、早速制作に取り掛かるため研究所のアトリエ棟に行きました。そこで驚いたのが陶器のためのアトリエと窯が新設されていたことです。研究所の皆さんのこのプロジェクトにかける思いをみました。

いよいよ作業のスタートです。まずは土の作業に必要な石膏型を作ることからです。作業を手伝ってくれた4人のサポートスタッフはいずれも優秀で、かつ誠実に対応してくれたおかげで順調な滑り出しとなりました。

第2週はじめに石膏型は予定通り完成し、週の後半には土による成形の第1段が終了しました。2週目の週末はメキシコ在住の彫刻家である五次勝さんのお宅にお邪魔することになり、パパントラという海辺の町まで約5時間かけて移動。日曜日はエルタヒンという巨大なピラミッド群を見学し、夕方にはハラパに戻りました。

第3週目は土による成形を集中的に行うと同時に、最初に成形した作品の焼成も始まり、作品がようやく具体化されてきました。また高橋清オマージュ展と山本健史作品展の合同展示は以前から計画されていた通り研究所に隣接する大学博物館の2階で行うとのことで、展示台のオーダーもこの段階で済ませました。また私の作品は博物館での展示を終えた後、大学の図書館のレクチャールームに永久設置されることが決まりました。

第4週目は最終の焼成を週の前半に行い良好な結果が得られ、並行する形で木工作業も順調に進み週末には作品すべての完成をみました。

2つのタイプのものを制作しました。まず壁面にかけたものですが、36cm 角で立ち上がりが10cmの直方体が4点です。この作品は焼成前に3 cm 角の穴を開け、焼成後にメキシコ産・日本産の木片を穴にぴったり嵌め込んであります。木の種類や産地によってその質感や色はさまざまです。次に展示台の上に置いてある作品が6点です。複雑な形態に見えますが、元はメキシコの木や石から型をとったものです。比較的単純な見なれた形の型が多数できるわけですが、それらをいくつか組み合わせてそこに土を入れていくとそれらが連なり、別の顔を見せるのです。ここでの土の色や窯については現地に入るまで分からなかったため、シンプルでありながら土や焼成の魅力を引き出しやすい炭化焼成を行いました。ただしこれについても日本で使用している窯とは少々勝手が違い、すぐに思うような結果は得られませんでした。

第5週目のはじめに展示作業を行い、私の仕事も終わりに近づき正直ほっとした気持ちとさみしい気持ちが交錯します。

その後、久世建二学長をはじめとした 高橋清オマージュ展 への日本人出品者が到着し5月3日のオープニングを迎えました。オープニング当日はさまざまなイベントが組まれ、ベラクルス大学学長も夫人同伴で参加され大変華々しい場となり、夜遅くまでたくさんの人で賑わい、その陽気な国民性もあり大変な盛り上がりとなりました。

一か月以上にわたる滞在制作の中でさまざまなことや人、ものとの出会いがありメキシコの文化を少しは理解することができたと感じています。印象に残っているのは自然の美しさや古代文明の壮大さとともに人々の人懐っこさでしょうか。全然知らない人とでも普通に挨拶する姿は今の日本人には信じられない光景です。そんな中で矢作さんを中心とした研究所のスタッフ、ベラクルス大学の関係者の皆さんには大変歓迎をしていただき、また親切をいただきました。最後に感謝を申し上げ、報告を終わります。

#### 付記

本論文は平成 24 年度発展研究の成果である。

(やまもと・たけし 工芸／陶磁)



写真上

メインで手伝ってくれたスタッフ。  
このほかにも大学生を中心にいろんな人が来て、時に手伝ってくれたりもした。

写真右

新設された窯。  
これは私が使う前の試焼き。  
構造や火の動きが日本のものとは違うためはじめは戸惑いもあったが終盤には楽しい窯たきとなった。





写真右  
オープングレセプション



写真下  
ベラクルス州立大学付属博物館での展示。  
この後付属図書館に移された。

